誰も座らない椅子

—Ogiso Sasa—

荻塑
沙做

誰も座らない椅子　　荻塑 做沙

　教室の真ん中にぽっかりと穴が開いたように、いつも、その席は空いていた。

第1章

　楠瀬黒人（くすのせくろひと)は、その空席の右隣の自分の席でいつも不思議に思う。
　教室の真ん中の一番目立つ場所にあるその席は、ずっと座る人がいない。
　誰のための席なのか誰も知らなかったし、その机を移動させようともしないし片付けようともしない。そして、何より、それがそこに在るのが当然のように、誰も違和感を訴えないのが、黒人には不気味で仕方がなかった。
「また、気にしてんの」
友人の綾織朔(あやおりはじめ)が、黒人の前の席に後ろ向きに座って話しかけてくる。彼の気さくな笑顔は、人を和ませる効果が絶大で、いつの間にか見ているこっちの方まで笑顔になってしまう。天然癒し系の黒人の友人だった。
　その付き合いは小学校三年の時のクラス替えに始まる。出会った頃はそんなに身長差はなかったのに、中三になった今は、朔の方が黒人より十センチ以上伸びて熊のようになっている。が、性格はそのままなので、まるででっかいテディベアのようである。
　それに対して黒人はいたって普通のサイズだったし、何か目立つような特技もない。成績も普通。生徒会の書記をしているが、押し付けられた形でなっただけで、自分から何かを積極的にすることもない。ごく普通の中学生である。
「学校の七不思議の一つったって、ただの机だろ。気にしすぎだよ」
「確かに何もないけどさ、どうして誰も片付けようとしないのかとか気になんない？」
自分だけが気持ち悪いのだろうか。釈然としないものを感じつつ、また目線はその机に戻っていく。三年に進級して、この教室で過ごし始めてから、もう一ヶ月が経とうとしているというのに、担任の教師ですら何も言わない。
　もっとも担任の沢渡先生は、ことなかれ主義の堅物で、そんな下らない質問に快く応えてくれるような人物ではない。授業に支障が無ければ問題はないという感じで、厄介な問題を持ち込む生徒を敵視する。だから、黒人はあまり好きではないし、相談する気にもなれない。それに、言ったところで厭な顔をされるのは
目に見えている。
「お前みたいにオカルト系な思考の奴なんてそうそういないし、それに幽霊が出るとか聞いたこともないし」
一体、何をそんなに気にしなくちゃならないのか、さっぱり分からん、と朔は笑うけれど、それは小さな棘にも似て、チクチクと黒人の神経に障る。
　自分の意見を肯定してくれる人が一人でもいれば少しは気が楽なのだが、生憎と黒人と同じにその席のことを気にしている様子の人間は見つからなかった。
　この中学の全校生徒数は千人近くいるはずなのだが、その中でたった一人というシチュエーションはあまり嬉しくはない。不思議なものが好きな姉がいた去年は、こんな風に孤独を感じることはなかったのに、今は完全に孤立してしまっている気がする黒人だった。
　だが、今日はいつもと少し様子が違っていた。いつもは無関心な生徒達の視線が、例のあの席に注がれている。とは言っても、ちらりと見る程度で誰もそこに近付こうとはしないし、あからさまに話す事もない。けれど、ひそひそと囁く声に耳を澄ませてみれば、その理由は簡単に分かった。
「転校生が来るのか。ここに座るのかな」
朔は、周囲の声が囁く噂をあまり本気にしていない様子だったが、黒人は、どうにも落ち着かない気分になる。
「このクラスに来るのなら、ここしか空いていないよな」
　この席に果たして人が座れるものなのだろうか。授業中はもちろん、休み時間や放課後ですら誰も座った人を見たことはなく、近付くものさえいないというのに……。
　漠然とした不安は自分だけが感じているのだろうか。
　めずらしく朔がその席を見る。黒人のような不安を感じているわけではなさそうだった。ただ、話のついでのように、ちらりと見て、目を逸らす。

黒人は自分の右隣のその席を、横目で見やる。

なんの異常もないごく普通の机と椅子がそこにあった。
ただ、誰も座らないという以外は……。

第2章

予鈴が鳴って教室の中が慌しくなり、朔も自分の席に戻り皆が席に着くとちょうど本鈴が鳴る。
朝のざわついた空気の中、しばらくして担任が教室に入ってきた。
いつも通りの朝の風景だった。だが、今日は少し違う。婚期を逃した三十も半ば過ぎの女性教師は、意味ありげに教壇から教室を見渡して、そして、おもむろに転校生のことを告げる。だが、すでに生徒達はそのことを知っていて今更驚いたりはしない。
間の抜けた白けた空気が辺りに漂う。自分の言葉に無関心な生徒達の様子に、教師の神経質そうな額が心持ち引きつっているように見えた。そんな微妙な空気の中、教師に呼ばれて転校生は教室の戸を開けた。何のためらいもなく、しっかりとした足取りで教室に入って来たのは小柄な女の子だった。
髪は肩よりも少し短めで、その色は漆黒というのに相応しいほどの瑞々しい黒色をしていた。今時めずらしいと言えるほど新鮮な色だった。そして、それを一層引き立たせるのは、黒目がちな大きな瞳と、人形のような白い肌だ。
不思議な雰囲気をまとう彼女に教室中の視線が集まる。
彼女は、その好奇心に満ちた視線に怯む様子もなく、教室の中をゆっくりと見回していた。その視線を受けて目を伏せる者、そのまま見惚れている者、無関心な者。いくつもの顔を彼女は素通りしていく。
そして、彼女があの机に目を止める。教室の真ん中の一番目立つ場所が空いているのだから、それは不自然なことではなかった。
けれど、黒人はその彼女の視線に不安な色を感じた。
それは、自分と同じ違和感を持つ仲間が欲しいと思う黒人の願望が見せたものなのだろうか。そう感じるのは自分が弱気になっているからなのか。皆が一緒でなければ嫌だというわけではないけれど、誰にも分かってもらえないというのは寂しいものである。だが、そんな黒人の心の内など知らぬ教師は、自分の仕事をさっさと進め、転校生の名前を黒板に書き始めていた。

風花(かぜはな)　雅(みやび)

何とも風雅な名前である。そして、彼女には似合いの名前だと黒人は思う。
教師は、彼女が聞いたこともない小さな村から、この都会の中学に転入してきたことを簡単に告げ、空いている席に着くように指示をすると、一つの厄介事が片付いたというふうにまた額を動かす。
糸のような細い目はいつも笑っているように見えなくもないのだが、その教師が本当に笑っているところを黒人は見たことがない。まるでいつも何かを企んでいるような意地悪キツネのようだ。そして、そいつが笑う時には決まって悪いことが起きる。
転校生は教師の指示通り、空いている席に向ってゆっくりと歩き出した。が、その表情は硬い。初めての場所で緊張しているのだろうか。それとも。
黒人は、彼女が自分の隣のその席に今から座るのだと思うと、彼女から目が離せなくなる。
彼女は、近くで見るとまつ毛が長く、普通に美少女だと黒人は思った。けれど、儚い感じはしない。物静かではあったが、お姫さまというよりは、女王さまというイメージの方が強いのは、その姿勢の良さのせいなのか。
その佇まいには凛とした覇気のようなものがある。彼女は自分の席の前まで来ると、一度足を止めた。それまで平然とした態度を崩さなかったのに、初めて躊躇するような素振りを見せた。けれど、それも一瞬のことで、それに気が付いたのは一番近くにいた黒人だけだったのかもしれない。彼女は鞄をそっと机の上に
置き、音を立てずに椅子を引いた。席に着く所作が美しく、その外見を裏切ることはない。何か習い事でもしているのだろうか。そんな感じの優雅な身のこなしだ。
事務的な教師の声を聞き流しながら、黒人は彼女をずっと観察していた。浅く腰を下ろし、背筋はすらりと伸びていたが、うつむいた横顔は何かに耐えるように、その口元が引き結ばれていた。膝の上に置いた両手は拳を作り、不自然に緊張している。
気分が悪いのだろうか。そうは思っても、今はまだ声を掛けることはできない。担任の沢渡は自分の仕事の邪魔をされるのを極端に嫌う。それは経験からの結論であって邪推ではない。以前に一度、具合が悪くなって教師に申し出た生

徒がいた。あと五分で授業が終わるという時だった。たった五分待てなかったというだけで、その倍以上の時間、ねちねちと厭味を言われ続け、その生徒は泣き出した。その様子を見て満足そうに口元を歪める教師の様子にクラスの誰もがぞっとした。
　あと、一分。そして、教師は時間に正確だった。その点だけは評価できる。
　彼女はうつむいたまま微動だにしなかった。大丈夫だろうかと、不安にならなかったわけではない。早く終われと、黒人は心で念じる。
　連絡事項を伝え終えて教室を後にする教師が戸口に向うのを横目で見ながら、黒人は急いで彼女に声をかけた。
「大丈夫？」
だが、彼女はそのまま眉一つ動かさない。
　辺りを見回しても、自分の他に彼女に声をかけようとする者はいなかった。普通なら何人かのお節介な人間はこういう時にはりきるものなのだが、やっぱりこの席の呪いなのかと思いたくもなる。
　仕方なく黒人は席を立って、彼女の顔を覗き込む。その時になってやっと彼女は、黒人に気が付いたようだった。大きな黒い瞳が黒人を見る。何かを喋ろうとするのに、声が出ないのか、微かに唇が動くのを黒人はじっと見つめていた。
　　”　タ・ス・ケ・テ　”
　彼女のくちびるが、そう動いた気がした。だが、どうすればいいのだろう。
　何をすれば彼女を助けることになるのか、さっぱり分からない。取りあえず保健室にでも連れて行った方がいいのかもしれない。自力で立てないのならと手を差し出すと、彼女はゆっくりと右手を上げる。
　この間、一分も経っていないのに休み時間の全てを使ってしまったような気がした。その上、クラスの皆は誰一人として彼女の異変に無関心だった。と言うより彼女自身に無関心だと言った方がいいだろうか。
　いつもなら声をかけてくる朔でさえ、今日は来ない。それは、やっぱりこの机のせいなのか。
　彼女は黒人の手にすがりながら、何かを小さくつぶやいた。
　机のことを考えていた黒人は最初、聞き間違いだろうかと耳を疑った。それはあまりにも彼女のイメージとは違う弱々しい声だった。うっかりすると聞き漏らしてしまいそうで、彼女の口元に注意を戻す。
　絞りだすようにゆっくりとした口調は本当に具合が悪いことを証明していた。
「風、のあるトコロに、連れてって」
その声は思ったよりもはっきりと聞こえたのが意外だったが、黒人は自分のやるべきことがはっきりして、ほっとした。
　外の空気が吸いたい、ということならば窓を開ければそれですむ。それとも彼女を窓の所まで連れて行った方が確実だろうか。
　閉め切った教室の中の空気は人いきれがして、少しよどんでいる。それはいつものことで、今日だけが特別空気が悪いわけではない。毎日のことなので黒人は気にしたこともなかったのだが、それで気分が悪くなったというのなら、窓際の席にしてもらったほうがいいんじゃないかと、ふと思う。
　転校生を窓辺へと連れて行く途中、黒人に気がついた何人かが、その様子を目に留めたようだったが、声は掛けて来なかった。厄介ごとに関わりたくないのは分かるけれど、少し冷たいんじゃないかと思わないでもない。
　彼女は例の机から離れるにつれて次第にしっかりとした足取りになり、黒人は途中で彼女から離れて先に窓に行き、鍵を外し、ガラス窓をスライドさせた。
　五月に入ったばかりのこの季節、風は冷たくもなく温くもない。教室の中にこもっていた悪い空気が外に出て行くよりも早く、外から風が吹き込んでくる。まるで黒人が窓を開けるのを待っていたかのように風は急いでいるみたいだった。
　彼女は風に吹かれて一瞬怯んだようにも見えたが、そのまま黒人の隣に立ち、窓の外の空気をゆっくりと吸う。何度か、深呼吸を繰り返すと白かった顔色に血色が戻ってくる。
「ありがとう」
抑揚の無いその声はとても小さかったが、しっかりとしていた。
「大丈夫なの？」
彼女の様子を気遣いながら、やっぱり田舎とは空気も違うのだろう、と黒人は好意的に解釈する。都会と言ってもこの

近辺は住宅地だから、公園や緑地も結構配置されていて、まだましな方ではあったが、それでも山の中とは全然違うものなのかもしれない。
「もし、窓際の方が良いのなら先生に言って変えて貰えば？」
　善意で黒人はそう言ったのだが、彼女は黒人の顔をじっと見て、そして無言のまま自分の席へと戻っていく。
　にこりともしない無愛想な彼女に、黒人は少しばかりむっとする。確かにお礼の言葉はあった。あったけれど、普通、話しかけているのに無言で立ち去るか？
　けれど、また彼女の具合が悪くなったら厄介だ。この様子だと、彼女のお守りをするのは自分になりそうだったし、下手をすると彼女はあの机と同じ扱いを受けそうな気までしてくる。
　なんだかんだ言っても黒人は、困っている人をそうと知っていて見過ごしに出来るほどドライな人間でもなかったし、そんなことをして姉に軽蔑されたくもなかった。
　相手は女の子なのだ。女性には優しく、というのが姉の教えである。人を見下すことはとても簡単で、理由もなく嫌うことだって簡単で、傷つけることはもっと容易い。だからこそ、どんな人に対してでも優しくなくてはいけないと姉は言う。それはとても難しいことで、時々は反発したくもなるが、結局は姉の言葉に
逆らえない自分がいる。それに彼女は、転校初日で不慣れな環境の中にいるのだから、多少のことには目を瞑ろう。
　それにしても転校初日からこの調子で、これから先やって行けるのだろうか。
　早くも前途多難な予感がして、黒人は気が重い。
　予鈴が鳴って、このまま窓は開けておいても誰も文句は言わないだろうと、彼女の後を追うように黒人は自分の席に戻っていた。

第3章

　転校生は、その後も何度か具合が悪そうにしていたが、最初の時よりはずっとましらしく、休み時間の度に窓へと行っては深呼吸を繰り返していた。もう黒人の手を借りることはなく、一人でも大丈夫そうだったが、結局、彼女から目が離せなくて、その日一日、転校生を目で追っていた。
「あの転校生って、どんな子？」
放課後になって、ようやく朔がそう尋ねてきた。
「自分で話しかければいいだろ」
　黒人は朝のことをまだ少し根に持っていた。自分一人に全部押し付けて無関心だったくせに、今になってそんなことを聞いてくる勝手さに腹が立つ。
「だって、近寄るなオーラ全開って感じだったし、山の中からでてきた子になに話せばいいのか分からんし」
転校生に興味が無いわけではないのに、誰一人として彼女に近付こうとしなかったのは、何を話せばいいのか分からないというのもあるのだろうが、それだけではないような気がした。
　確かに、都会生まれで都会育ちの自分たちには、彼女が暮らしていた名前も聞いたこともないような小さな村のことなど尋ねようもなかったし、何を言っても田舎者とバカにしているようにしか聞こえなかったら、苛めてるみたいで気が引ける。きっかけさえあれば、打ち解けて話せる自信はあるのに、そのきっかけすらないこの状況では、朔ばかりを責められない。そして、その責任の大半は彼女の方にあるように黒人は思えてならない。現に、何人かの女子が廊下で彼女に声をかけたそうにしていたが、結局、きっかけを掴めずに離れていった。
　思い返してみれば、彼女の声を聞いたのは最初のやりとりの時だけだったような気がする。 初めての場所で緊張しているのかと思えば、不思議はないのだろうが、不慣れなはずの新しい学校の中で困っている様子一つ見せないのは少し奇妙だった。移動教室の時も、この広い校舎の中を迷うことはなく、すでにここの建
物全てを把握しているようにも見えた。
「そう言えば、朝、何話してたんだ」
「気分が悪そうだったから声かけたら、外の空気が吸いたいって言うから、窓のところまで連れて行っただけ」
「やっぱり、ここと違って空気の奇麗なところだったのかな」
「だから、そういうことは直接本人に聞けばいいだろ」
「でも、その転校生がもういない」
　部活に行く者や、塾に通っている者の大半は既に教室を出ていて、生徒の数は半分くらいに減っていた。そして、まばらになった教室の中に、彼女の姿はなかった。
　その存在感は決して希薄なほうではないと思うのだが、隣にいた黒人まで気が付かないうちに帰ってしまったというのなら、やっぱり彼女はここに馴染む気はないのかもしれない。
　彼女は一体、何者なのか。聞いたこともない小さな村の出身だというが、そこでどんな暮らしをしていたのか。
　何故、彼女は突然この都会に来たのか。
　あの席に座って何を感じたのか。
　転校生に聞いてみたいことは無数にあったが、そのどれもが口にする前にどう思えてきて、結局は言葉にならずに消えてしまう。
「そろそろ、部活に行こうぜ」
朔にうながされて、黒人は顔を上げる。
　教室の中には、二人の他にもう人はいなくなっていた。
　窓の外には白い空が広がり、教室の中には青い影が差し込んでいる。無人の教ど不気味なものはないと、扉の前で立ち止まり振り返った黒人は思う。
　誰もいないはずなのに、何かがこちらを見ているような気がして落ち着かない気分になる。それは気のせいだと言ってしまえるような類の不安でしかなく、逆に何か見えないかと思わず目を凝らしてしまうような、そんなとりとめのないものだ。黒人は時々、目には見えない何かの存在を妄想する癖があった。それは小さい頃からずっとで、家族はそのことをごく自然に受け入れてくれて、自分が変なのだと気が付いたのは、学校に通い始めてからだった。
　はっきりと何かを見たことはなく、自分でも幻想だと思う程度の感覚である。

だから、これも黒人の妄想でしかない。
　だが、本当にそうなのか。時々、分からなくなる。
「早く来いよ」
朔に呼ばれて、黒人は教室を後にした。

そして、誰もいなくなった教室にその足音がこだまする。

第4章

教室の中、人影もまばらになったその中心で雅はじっとその時を待っていた。
初めての学校は、ただ、そこに存在する人の多様さに驚かされて、何をどうすればいいのか全く分からなかった。
授業の内容は以前に自宅で学習したところだったから何の問題もなかったが、息苦しいこの建物は好きになれない。学校という場所そのものが、雅には初めてだということもあって、こんなにも多くの人間が一箇所に集まるということに対して恐怖すら覚えた。人が集まる場所というのは、ただでさえ空気がよどみがち
だというのに、どうしてこんなにひどい空気の中で、みんな平気な顔をしていられるのだろう。その上、自分の席に居座るもののせいで必要以上に疲れた。
愚痴を言う相手もいない雅は、一人で盛大な溜息を吐く。
とにかく、この席のものを何とかしなくてはならないし、他にもいろいろと憑いて来たものもある。このまま連れて帰るのはいやだし、途中でどこかに行かれても困る。ここの屋上でなら、風も自由に使えるだろう。
カタンと音を立てて、雅は立ち上がった。
見えるところに人の姿はなかったけれど、色んな方向から沢山の人の立てる物音がしていた。一人であって一人でない。その微妙な距離感を雅は心地よく感じる。学校に来て初めてそう思った。
これが放課後という独特の空気なのだろうか。
初めての経験は新鮮でもあり、それと同時に神経も使う。そして、緊張から解放された時の弛緩した感じは、何気ないものでも好ましく思わせてくれるものである。それは、優しい気持ちになる瞬間だった。
ゆっくりと教室を出ると、雅は中央の階段へ向う。
校内の見取り図は頭の中に入っていた。この教室は、この建物の全体の中心に位置していて、屋上へ出る階段へはそれほど遠くはない。三つあるうちの中央にある階段だけが屋上まで続いている。
雅は急ぐでもなく、階段を昇り始めていた。
白い壁は手垢で薄汚れ、北側の窓の明かりは白い光で階段に影を落していた。築二十年ほどだと聞いていたが、無機質な石の校舎はそれ以上のよどみを内包しているみたいだった。
人が多く集まる場所というのは、多かれ少なかれ汚れているものである。けれど、雅がこれまで暮らしていた祖母の家は築百年を超えていたが、少しも汚れてはいなかった。掃除が行き届いているのは当然として、空気が奇麗だったのだ。いつも自由に風は通り邪気を流してくれていた。だがここは、風が吹きだまる。
四階、五階。これまで誰とも会っていない。
近くの教室には人の気配はしているのだが、誰も廊下に出てこない。それは、決して偶然ではない。雅が抱えているもののせいなのは明らかだった。

誰もこちらを見ないで

悲しい願いは、何時の、誰の、ものなのかは分からない。
それだけを繰り返し、他は何も見えない。
雅に憑依した霊は逃げ出そうと必死に抵抗してくるが、雅はその霊の思念を利用して他人を寄せ付けないようにしていた。
話しかけてくる者もなく、その姿さえも意識させないように、ひとつのことに意識を集中させる。この状態で誰かに触れたら、この霊に逃げられてしまいそうで、そうなるとまた探しに行かなければならなくなる。この場で何とか出来るのなら苦労はないのだが、雅にも事情はあった。
教室に入ってすぐにその気配は感じていた。自分の座る席を見た時、いやな予感が脳裏をかすめてよぎり、そして、自分がひどくちっぽけなものに思えた。
ここには自分の味方はいないのだと思うと、そのまま逃げ出してしまいたくもなった。 でも、逃げたところで何も解決しない。それは、雅を育ててくれた祖母の言葉だった。雅の力を理解して、その使い方を教えてくれた人でもある。その祖母が寿命でこの世を去り、そして、雅はこの都会に出て来た。
自分の意思ではなかったけれど、これが祖母の遺言なのだ。こんなところでその祖母を失望させるようなことはでき

ないではないか。
　それは、半ば意地のようなものだった。
　霊に対して何の思い入れもない雅は、その感情にひきずられることはない。ただ、やらなければならないことだからやっている。
　けれど、ここには味方はいない。それが不安でもあり、寂しくもあった。

第5章

　黒人は、部活へ行く途中、一階まで降りた所で忘れ物に気が付いた。急いで教室に戻ると、入れ違いに教室を出る転校生を見かけて立ち止まる。
　教室の中に他に人はいない。とっくに帰ったものだとばかり思っていたのに、今までどこにいたのか、ものすごく気になった。
　それに、人目を忍んで彼女は何をしているのか。
　黒人は思わず彼女を追いかけていた。
　転校生の彼女は中央の階段に向っていた。鞄も何も持っていないところを見ると、これから帰るというわけでもなさそそうだった。そして、階段を上へと昇り始めたのを見て、黒人は疑惑を深める。そのまま、彼女の後を追いかけながら、自分のやっているのはストーカー行為なのではないかと思いつつも、それでも途
中で帰る気にはなれなかった。
　彼女は何かを隠している。そう、秘密の一つや二つ、誰にでもあるものだし、黒人にもある。そして、他人の秘密をこそこそと嗅ぎ回るのはほめられたことでないことも充分承知している。けれど、それでも気になるものはしかたがない。
　たとえ、あとでものすごく悔やむことになったとしても、黒人はその好奇心を抑えることが出来なかった。

　　好奇心は猫を殺す

とは、よく言ったものである。そして、

　　後悔、先に立たず

という言葉を黒人はあとで思い出すことになる。
　黒人は、そのまま彼女を追いかけて屋上への階段を途中まで来ていた。
　外の明かりが影をつくる扉の影の暗がりに、黒人は身を潜めて、彼女の様子をじっと窺う。屋上の出入り口には普段は鍵が掛かっているのだが、何故か、彼女は普通に扉を開けて外に出たらしい。金網のフェンスが廻らされた殺風景な屋上は風が強く、日除けもない殺伐とした場所で、立ち入りは禁止されていた。
　教師達の目を盗んで秘かに利用している生徒はいたが、あまり快適な場所でないこともあって、普段から人気のない場所だった。彼女がどうやって屋上に出られたのか、黒人は疑問に感じながらも、彼女から目が離せなかった。
　引き返すのなら、今だ。だけど、彼女が屋上で何をしようとしているのか、このまま見届けずに帰れるだろうか。
　黒人は迷いながら、結局、屋上への扉の影から、最期まで見届けることを選んだ。

第6章

　雅は、屋上の真ん中あたりに立って、東の空を見ていた。日が落ちて間もない今の時間は、まだ空はほんのりと明るく、昼間の余韻が残っている。
　校庭で練習している運動部の人達の声が、森の木々のざわめきのように遠くに微かに聞こえていた。
　屋上には雅の他に人影はない。
　ひっそりとした世界に、自分一人が立っている感覚は、雅を山に帰らせる。
　自分は一人しかいない。けれど、耳を澄ませば風に乗って様々なものが自分を取り巻くのを感じる。
　空を見上げれば、そこに懐かしい景色を見ることができる。
　ここでも自分は大丈夫。いつかは一人になることは知っていた。
　だから祖母は、雅が独り立ち出来るように色々なことを教えてくれた。
大丈夫。雅は、自分に言い聞かせるように大きく息を吸い込んだ。胸の前ですっと手を合わせる。指先だけを合わせ、掌は少し離して斜めに、ちょうど二等辺三角形の形がきれいに出来上がる。それは何かの手印のように見えなくもない。
　雅は軽く目を閉じて、息をゆっくりと吐き出す。
　いつの間にか風が吹き始めていた。

　普段から屋上に吹く風は強いのだが、今日の風はいつもとは様子が違う。冷たくも温くもない風が黒人のいるほうにまで吹き込んでくる。その感触は、朝、彼女のために窓を開けた時のものとよく似ているような気がした。
　彼女は、閉じていた目を見開き、空の一点をじっと見つめながら早口で呪文のようなものを唱え始めていた。

アハリヤアソバストマウサヌアサクラニシナツヒコノカミオリマシマセアハリヤアソバストマウサヌアサクラニシナツヒコノカミオリマシマセアハリヤ・・・

　その声音は、神主が唱える祝詞のような響きで、屋上全体にその声が広がっていくような気がした。言っている内容は分からないのに、神聖なものを連想したのはその場の空気のせいなのか、それとも彼女自身の雰囲気のせいだろうか。
　儀式めいたその様子に、黒人は思わず息を呑んだ。
　こんな場面に遭遇するとは、さすがの黒人も予想していなかった。けれど、少しでも身動きしたら彼女に咎められそうで、帰るに帰れなくなっていた。
　彼女が言葉を続けるにつれ、風は強く激しくなってくる。

　不思議なことに、そんな強風の中にあっても彼女自身には風は吹きつけていない。 制服も髪も、少しも乱れていないのは、風が彼女を避けているのだろうか。それとも、彼女を中心に風が起こっているのか。けれど、その光景はとても自然で、黒人は気持ち悪いとは思わなかった。
　じっと目を凝らしていると、まるで彼女の周囲に風が通る道でもあるように、見えない風の軌道が黒人にも見えるような気がしてくるから不思議だ。
　それは彼女の唱える呪文のような言葉の響きのせいなのか。意味が分からない音の羅列は、ある種の音楽を聴いているようでもある。
　雅の合わせた手の中に光の粒のようなものがふわふわと漂い始め、やがてそれは一つの形を形成し始めた。光のかたまりは次第に大きくなり、彼女の手もそれに合わせてふわりと広がっていく。彼女はその光の塊を大切そうにそっと胸に寄せる。そして、それがひときわ強く輝きを放った瞬間、黒人は思わず目を閉じていた。やがて、恐る恐る目を開けた黒人は、その光景に見惚れていた。

　雅の手の中には白い光の蝶がいた。
　ゆっくりと羽ばたく蝶は彼女の手の中から逃げようとはせずに、彼女の顔の高さまでふわりと舞い上がると、その場

で静止する。こんな時間にこんな場所に蝶がいるとも思えなかったが、見たこともない白く光る蝶はふわりふわりと彼女の手の中で羽ばたきを繰り返す。
　雅が何かを訴えるように天に手を伸ばすのを見たような気がしたけれど、はっきりしない。ただ、次の瞬間、光の蝶が彼女の手の先から天へと飛び立ったように見えた。だが、その瞬間、風が吹き荒れて、黒人ははっきりとそれを見ることができなかった。
　どれぐらいの間、風が吹いていたのか。いつの間にか風が止んでいることに黒人は、はっとする。そして、黒人の目の前には転校生がいた。

第7章

　雅は黒人を見つけて、怒ったような、困ったような顔をしていた。
　一瞬、黒人は、彼女がどうしてそんな顔をするのか分からなかった。だが、すぐに自分のせいだと理解する。転校生の後を尾けて屋上まで来て、その上それを盗み見して、それを彼女に見つかった。そう状況を頭の中で整理してみると、非は黒人にある。けれど、今来たばかりだと装えれば問題はないだろう。たぶん。
「ここで何をしていたの？　屋上は立ち入り禁止だよ」
黒人は何も知らないような顔で、彼女に尋ねていた。その黒人の視線に彼女は困惑した様子で、少し迷ってから諦めたように応えた。
「このことは誰にも言わないで欲しいの」
　彼女が何を指してそう言うのか、黒人は一瞬迷う。屋上に出ていたことを秘密にしたいのか。屋上で妖しげな儀式をしていたことを秘密にしたいのか。それとも、黒人がどこまで見ていたのか探りを入れているのだろうか。
「ここで何をしていたのか、教えてくれたら誰にも言わない」
　口止めされなくても他言するつもりは最初から無かったけれど、一日中彼女のことが気になって色々と思いを巡らせていたのだ。この位の意地悪は許されるだろう。けれど、彼女は黒人の問いは当然だとでも言うように、逆にほっとしたような顔をした。根拠のない親切は信じないタイプなのか。取引を持ちかけられて
ほっとするというのは、やはり普通の感覚ではないと黒人は思う。
　山育ちであるからといって世間知らずというわけでもないらしい。
「君の座っている席は、もう何年も使っていない席だったんだ。片付けられもせず、誰も使わずそのまま放置されていた。最初、あの席で気分が悪そうだったけれど、何があったのか知りたいんだ」
　あの席について自分なりの仮説は持っていたけれど、それを誰かに話した事はない。それはあまりにも非現実的で、笑い話になってしまう類の仮説だという自覚もあって、誰にも言えなかったのだ。けれどもしも、本当に何かがあるというのなら、自分が感じていた違和感のようなものは、確かに存在していたことになる。
「あの席には幽霊がいたのだと言ったら、信じる？」
雅は淡々とした口調で黒人が期待した言葉を告げた。意外な言葉に黒人はうろたえる。 黒人は彼女の真意が分からず、それを安易に信じてもいいものなのか少し迷う。確かに黒人は霊の存在を疑っていた。その言葉は黒人の疑惑を肯定するものだったけれど、それをそのまま鵜呑みにするには、彼女のことを知らなさ過ぎた。
　姉の影響もあって、もともとオカルト関係には興味があって調べたりしていたから、普通の人よりはそういうものの知識はあった。が、黒人自身、幽霊を見た経験はない。
　けれど、そういうものが存在するということは信じている。でも、素直にそれを認めるのも何だか恥ずかしくて出来ないのは、お化けの類の話はほとんどが迷信であり、頭から信じているなどと言ったら、からかいの対象にされそうだからだ。
「幽霊って、やっぱりいるんだ」
　黒人は少し茶化すように問い返す。
　そして、雅はそんな黒人の質問に、感情のない声で淡々と返す。
「幽霊は存在する。でも、いないと思う人にとっては存在しないものだと思う」
「つまり、君はそれがいる事を知っているけれど、その存在を信じない人には、いない、ということ？」
　それは、とても冷たい感触のする言葉だと黒人は思った。突然彼女との間に大きな壁が現れて、隔離されるイメージが頭に浮かぶ。幽霊のことを信じていないわけではなかったが、そんな風に言われると少し傷つく。
「信じない人にいくら説明しても分からないから」
　何か、過去に苦い経験があるのだろうか。
　雅はごく普通にそう思っているようだった。でも黒人は、それは違うと思う。
人は無知な生き物で、知らない事があるからこそ、それを理解しようと考えることの出来る生き物なのだと思う。確かに、信じない人間に何かを理解させようとするのは大変なことだけど、永遠に理解しないなんてことはないと思いたい。
「それじゃあ、幽霊って、どういうものだと君は思う？」

黒人は、彼女の見ているものに興味があった。霊能者と呼ばれる人たちの世界に憧れのような気持ちを持っていることも否定出来なかったし、自分と同年代の子がそんな力を持っているのが羨ましかったのかもしれない。
不思議と雅が嘘をついているとは思わなかった。
雅は、黒人がそのまま引き下がらないことを悟ったのか、諦めたように肩をすくめると屋上側に戻り、扉の横の壁に背を凭れる。
暮れ始めた空に白い雲が少し色づき始めていた。
黒人がその隣に腰を下ろすと彼女はゆっくりと話し始めた。
「人間は魂(こん)と、魄(はく)と、霊体で出来ていて、死ねば魄は土に返り、魂は天に還る。そして、霊体はその記憶。自然と消えるものと、生前の感情に左右されて、この世にいつまでも残ろうとするものがいる」
「つまり、この世に未練を残した霊体が、幽霊だということ？」
黒人の問いに、彼女は少し考える風に小首を傾げながら、ゆっくりと続けた。
「残留思念。のようなものだと思う。生きている間に感じたものが、そのままその場に残ってしまう現象。そして、強い感情ほど明確に残るから、死の間際の記憶が多いのだと思う。だから、幽霊を見たり感じたりすると、とても怖い」
確かに、幽霊というものは無条件で怖いものである。
その気配を感じれば、背筋が寒くなり、理由も分からず逃げ出したくなる。
目に見えないものだから、在るのか無いのかはっきりしないものだから、怖いのだとばかり思っていたけれど、死にまつわる記憶だから怖い、というのは妙な説得力があった。
生きている間には決して知ることのない事柄であり、未知の世界でもある死は誰にでも訪れるのに、生きている人間の誰もがその実体を知らない。
「でも、生きている人間に取り憑いたりするものもあるよね。それは残留思念とは違うだろ」
「感受性の強い人が、その記憶に触れたら、 その思念に捉われて異常な行動をしてしまうのは、不思議なことではないと思う。霊媒と呼ばれる人たちが分かるのは、その霊が何故、そこに留まるのかという理 由だけであって、その霊が何をしたいのかなんて、想像するしかない。でも、理由が分かれば解決方法も自然と見
つかるものよ」
彼女の抑揚のない声は、低く柔らかな音を立てて、黒人の耳に心地好く届く。
どこの訛りもない普通の言葉のはずなのに、どこかなつかしくて、どこか切ない。癖になりそうな声だった。
黒人はそういうことが出来る人を身近に知っていた。黒人の叔父がそういう性質の人で、霊関係のものも扱う探偵事務所を開いていた。母の弟で、もうすぐ四十になろうかというのにまだ結婚はしておらず、家にも何度か遊びに来ているが、実際に仕事をしている所を見たことはないので、詳しくは知らなかった。けれど、彼女も叔父とどこか雰囲気が似ていて、最初からそれが気になっていたのだと今になって気が付く。
「楠瀬くんは幽霊を信じるの？」
自己紹介をした覚えはなかったが、話の腰を折るようで聞き流すことにした。
今日会ったばかりの転校生と、立ち入り禁止の屋上で幽霊談義なんてありえないことだ。普通ならこんな風に相手にしないだろう。けれど、黒人はこの会話が楽しかった。いつもなら姉としかしたことのないような類の話を、身内以外の他の誰かとしているのに、その違和感の無いことが妙に嬉しい。
「叔父が、そういうものを見る人で結構色々な話を聞いてるから、信じてはいるけど、実際に自分の目で見たことはないんだ。でも、君は霊能者なんだろ」
「人に頼まれて、浄霊や除霊はしないけど」
「どうして？」
「生きてる人は自分で何とか出来るじゃない。死んでしまったら、もう何も出来ないから、そういうものの為にこの力はあるんだと私は教わった」
彼女はもう一人前の霊能者である自負があるらしく、その言葉に揺らぎの無いものを感じさせる。そして、生きてる人は自分で何とか出来る、という彼女の言葉に、どこか突き放すような冷たさがふくまれているように聞こえて気になった。
それは、理解を拒絶する響きを秘めている。自分は違うのだと。同じではないのだと、暗に仄めかしているのだろうか。

優越でもなく、劣等でもない。けれど、あからさまな拒絶の匂いがする。
そういう雅だって生きている人間なのに、まるで自分はもう死んでいるみたいなことを言うのが許せなかった。
「生きている人が無関係なんてことはないだろう」
黒人は、まるで自分が否定されたみたいで無性に腹が立った。
雅は、黒人が何故怒るのか分からないらしく、びっくりしたような顔をする。
「生きている人は時間が解決してくれる。生きていれば時は流れ、未来は目の前にいつもあるけれど、死んでしまったら、もうそこに未来はないの。死者の時間は止まってしまうから。死者にあるのは魂の転生であって、同じ人間をやり直すことは出来ない。だから、いつまでもこの世に未練を残しているのは死者にとって一番不幸なことなのだと、思う」
雅は慎重に言葉を選びながら、黒人の様子を窺う。
自分の言葉で誰かが怒るとは思っていなかったようで、初めて目が合う。
「ごめん」
彼女は人付き合いが下手なだけなのか、誤解をされたことに困惑しているのを見て、黒人は自分の思い違いを謝罪する。けれど、彼女はその黒人の言葉にも戸惑ったようだった。
黒人は、これほどまでに意思の疎通が難しいものだとは思ってもみなかった。
まるで異国人と話をしているようだ。文化や環境が違えば常識も変わってくる。同じものを目の前にしても、同じように感じるとは限らないのだ。今までは、周囲の人とそれほど価値観が違うことはなかったのに、彼女は全くの別環境からここに来たのだ。
彼女の方がずっと不安で、心細い思いをしているのかもしれない。
気が付けば、辺りは更に薄暗くなり、校庭で部活をしていた人達の声も聞こえなくなっていた。急に冷え込んだように感じ、黒人は背筋が寒くなる。
随分とここで彼女と話し込んでしまったようだ。
「もう帰らないと」
たそがれる空を見ながらつぶやく彼女の声が、とても寂しげに聞こえた。
黒人は部活のことをすっかり忘れていたことを思い出し、しまったと思う。
だが、今更だ。今日はこのまま帰るしかない。屋上の扉を閉め階段を降りながら、彼女がとても小さいことに黒人は気が付いた。小柄だとは思っていたけれど、自分の肩くらいまでしか身長がない。
ふわりと髪の匂いが鼻先をくすぐり、女の子って可愛いな、と黒人は思う。
同じ年頃の他の男子に比べて女の子に慣れているのは、日万里と竜司の関係を間近に見てきたせいあったが、女の子に優しくするのは当然のことだという姉の教えが染み付いているからでもあった。
姉のことを思い出し、黒人の表情がふっと優しくなる。帰ったら今日のことを話してみようか。今年、高校生になった姉は、志望校には行けなかったが、家の近くの私立高校に入学し、最近になってやっと親しい友達が出来たらしい。それまで、ずっと友達なんて家に連れてくる事はなかったのに、先週末、いきなり連
れて帰ってきたその人はとても奇麗な人で、姉とは正反対の魅力のある人だった。
姉が太陽ならば、その人は月の光のような美しさを持っていた。二人の親密な様子を見て、嬉しいような悔しいような気がしたのは、黒人がその人に嫉妬していたからかもしれない。
黒人と日万里は、仲の良い姉弟だった。顔立ちは少し似ている程度で、性格はまるで違う。日万里は自分の欲望に忠実で、思いつきで実行に移してしまうという恐ろしい性格をしていた。突飛なことを考えては、失敗をも恐れずに実行に移し、幼馴染みで姉とは同年の竜二くんを振り回している。
その様子を傍で見ながら、そして、黒人も漏れなくその被害に遭ってはいたけれど、それでも離れたいとは思わないのは、姉に特別な想いを抱いているからだ。
これは、絶対の秘密だった。朔にだって言っていなかった。
他より仲の良い姉弟だとは思われているだろうが、黒人が何を想っているのか、本当のところを知る者はいない。
小六の頃、それを自覚した時、自分は間違っていると思った。けれど、好きになってしまったものはどうしようもないと、今は半ば自棄気味に開き直っている。
その思いが報われることなどないのは知っているし、報われてはいけないことも分かっていた。けれど、だからと言

って嫌いになれる筈も無いし、その感情が消えてしまうこともない。
　そして、その想いは絶対に秘密にしなければならないことも分かっていた。
　伝えたところで誰も幸せになんてなれないのだ。自分の初恋に未来はないと、知ってしまった日から黒人の苦悩は始まり、今に至る。いつか、この想いも思い出に変わって笑って話せる日が来るのだろうか。
　今の黒人には想像もつかなかったが、隣を歩く小柄な女の子を見て、黒人は無意識に優しい笑みを浮かべていた。

第8章

　教室に戻ると、当たり前のことだが、誰もいなかった。
　すでに下校時間は過ぎていて、ぐずぐずしていると見回りの教師に見つかりそうだった。だが、黒人は彼女の席の前で立ち止まる。ずっとあった違和感は、今はもう何も感じない。明日になればはっきりするだろう。
「この席には、どんな霊がいたのかな」
夕焼けの名残のオレンジが鈍く窓を染めて、並ぶ机に影を落す。
「誰も、わたしを見ないで」
「え？」
彼女自身の言葉なのかと錯覚するほど寂しげな声に、黒人は、はっとした。
　雅は無表情なまま、机の上に視線を落していた。
「こちらを見ないで、私を見ないで。それだけを繰り返していた。何故そう思ったのかは分からない。何か凄く辛いことがあったのだと思う。でも、この席の思念は、見られたくないという思いが一番強く、残っていた」
「いじめられてたのかな」
「分からない。でも、もう、その思念は消えた。それでおしまい」
「それって、何か寂しいな」
「あのままずっと苦しい記憶を繰り返していた方が良かったとでも言うの？」
彼女は少し気分を害したみたいに、大きな目で黒人を見る。
「いいや、違う。違うけど、何となく寂しいと思ったんだ。まわりに影響するくらい強い思念だったのは分かるけど、それを残していった人の本当の気持ちはどんなだったのか分からないままで、なんかスッキリしない」
　自分が納得出来る答えが見つからないから、そんなふうに感じてしまうのか。彼女の言うことは頭では理解出来たが、感情的には何か物足りなさを感じてしまう。
「他に何が出来るの？」
　彼女は心底から分からないようで、黒人はどう説明したらいいのか戸惑う。
「一人一人、感情は違うもので、残る思念も様々なのに、どうして理解出来ると思うの？」
　雅は、そんな事を知りたいと思ったことがなくて、黒人が何を言いたいのかが分からなかった。人間の考えていることなんて、千差万別、その本人にしか分からない。想像することは出来るかもしれないが、それは本人のものではなくて、そうではないかと考える他人の思考に過ぎない。他人のことを思う自分の感情を
納得させたいだけなら、自分で納得のいく答えを見つけるしかないだろう。それは、雅の考えることではない。
「自分のことでさえ分からなくなる時があるのに、他人の、ましてやごく一部の思念だけで、それの全てを理解するなんて不可能だわ」
　黒人は、彼女の言うことは正しいと思った。それは黒人の感傷でしかなく、出会う人全ての想いを理解するのは不可能だとも思う。けれど、誰も見ないで、という言葉はひどく切ない響きに聞こえた。
　他人を拒絶し、人間の視線に怯える人の姿が、胸に痛い。
　それは、黒人が雅にそれを重ねていたからなのかもしれない。今日一日、彼女をずっと目で追いかけて感じた寂寥感は、決して特別なものではなかった。自分にも当てはまったし、誰もが持っている感情だとも思う。
「だけど、もしそんな感情を抱いたまま死んでしまったのなら、悲しいだろ」
　黒人が感傷的になっていくのを雅は不思議に見つめる。
「ここの思念は、生きてる人のものよ。一時の感情でも、残ってしまうものもあるし、残した本人でさえ気が付いていないかもしれないのに、それを今さらどうしろというの」
「生きてる、の？」
　霊になって残るくらいだから、自殺してしまったのかと、黒人は思い込んでいた。幽霊なんて言うから、普通なら死んでいると思うだろう。
「生きている人にだって霊体はあるもの。当然でしょ。だけど、その感情だけが残っているのは不自然なことだし、感情だけでは何も出来ないもの。だから、私がいる。過ぎてしまったことを変えることは出来ないけれど、生きていればまた別の感情も生まれるし、辛いことばかりでもないでしょう」

　彼女の言っていたことがようやく腑に落ちた。そして、彼女が何も考えていないわけでもないのだと分かって、黒人は少しほっとした。が、がらりと、戸が開き、人影が中を覗く。黒人はぎょっとして教室の入り口を見る。
「もう、下校の時間は過ぎてますよ。何をしているんです」
　担任の沢渡だった。まずい相手にみつかったと黒人はひやりとする。
「すいません。すぐに帰ります」
　説教が始まる前に黒人は荷物を集める。だが、雅は沢渡に近付いて何かをそっと囁いた。沢渡ははっとして雅の席を見て、そして、早く帰りなさいとだけ言って教室を出て行った。
　黒人は彼女が何を言ったのか知らないが、厭味ったらしい説教から逃れられたことをラッキーに思う。せっかく見逃して貰えたのだ。ぐずぐずしている暇はない。沢渡の後を追うようにして教室を出ると、居残っていた生徒が数人、同じように昇降口へと急いでいた。

第9章

　急いで校門を出た後、二人はしばらく並んで歩いた。
「さっき、先生に何を話してたの」
　黒人は学校から遠ざかるのを確認して彼女に聞く。
「別に何も」
「そうは見えなかったけど」
「あの机、先生が昔使っていたものなの。あの思念の主は先生だった」
「誰のものか分からないって最初に言ってたよな」
「本人が近くにいると変な作用があるみたい。勿論、先生は何も知らないし、わざとでもない。あの教室に入るのすごく厭だったでしょうね」
　確かに、無意識とはいえ、自分の残した思念が渦巻く教室は居心地が悪かっただろう。
「誰にでも過去はあるってことか」
　真相を聞かされても黒人は少しもすっきりしなかった。けれど、それ以上詮索する気にもなれなかった。代わりに屋上でのことを尋ねていた。
「それで、屋上で何をしていたの？」
「浄霊」
　彼女はもう喋り過ぎたとでもいうように、口数が少なくなる。手抜きもいいところで、説明不足な感も否めないが、浄霊というのは、この世に残る霊魂を浄化することなのは黒人も知っていた。
「あの呪文みたいなのは？」
「神様を呼ぶための祝詞(のりと)」
　彼女は神を降ろす巫女のような力を持っているのだろうか。霊能者にも色々なタイプがあって一括りには出来ないらしい。だから詐欺だとか、インチキだとか言われてしまう。確かに詐欺紛いの人達もいるし、他人の不幸で金儲けをする者もいるけれど、ちゃんと正しく力を使う者もいるのだ。そして、彼女はホンモノ
なのだと黒人は思う。
「あの風は、君が起こしたものなの？」
「私は、風を使って浄霊するから。教室のように風の通らない密閉された場所では何も出来ない」
　だから、あの時、風のある所に連れて行って欲しいと言ったのか。黒人はやっと納得する。外の空気が吸いたいのではなく、風の通る場所が彼女には必要だったのだと。
「神様って、本当にいるんだ」
「便宜上、そう言っているだけ。正確に説明するのは難しい。見えない人にはいないのと同じ」
　つまり、彼女にとっては神様も幽霊も同じということなのか。見えない人に説明するのが面倒なだけかもしれないが、黒人にはその違いが分からない。
　淡々と話す彼女は、はっきりいって無愛想そのものだったけれど、その声は聞いていて飽きることはない。
「楠瀬くんは、自分のことを知らなさ過ぎる」
「そうかもな」
彼女が何を言いたいのか分からないまま、黒人は相槌を打つ。
「どうして、あの席のが気になったの？」
「自分の隣の席なんだから、当然だろ」
「でも、反対側の人は見向きもしなかった」
　彼女にそう言われて、初めて黒人はその奇妙さを自覚した。
　確かに、自分以外の誰も、あの席のことを気にも留めていない様子で、そのことを黒人は訝しく思っていた。皆が鈍感なだけだと、そう思っていたのだが、自分の方がおかしかったのか。
「楠瀬くんには能力がある」
「自覚はないけど」
「自分限定の魔除けだから、何かあったとしても気が付かずにいたのだと思う」

「自分限定って、」
　それって、役立たずっていうことか？　あまり嬉しくない。
「でも、霊の影響を一切受けないから、私は羨ましい」
　雅は心からそう思う。誰かの事を羨むなんて、生まれて初めてかもしれない。
霊の記憶に揺さぶられることがなくなれば、それだけリスクも減る。でも、能力の譲渡の仕方なんて知らなかったし、そんなことが出来るとも思えない。だからこれは雅の願望にすぎない。
「初めてあの席に座った時、動けなくて、でも、楠瀬くんが声を掛けてくれたでしょ」
「他に誰も近付かなかったから、仕方なくだけど」
「それでも、私は本当に助かった。だから、役立たずだなんて思わないで」
　雅は、黒人の能力を必要としていた。この人の密集した都会で、いつまた今日のような事態に陥るか分からないのだ。
　雅にはやるべき事がある。そして、雅に残された時間はそう長くはない。
「そんなこと言ったっけ？」
　黒人は、心の中で思っただけだと思っていたのに、無意識に言ったのかと首を捻る。
「霊体って、生きてる人にもちゃんとあるんだよ」
何度も同じことを繰り返す彼女が、何を言いたいのか分からずに、黒人は雅を凝視する。
「人間って、隠しておきたいことほど強く心に思うものだから、その秘密が大きければ大きいほどよく響くの」
「冗談だろ」
黒人は、思わずその場にしゃがみ込んでいた。
「お姉さん、奇麗な人だね」
雅がダメ押しするように呟く。
「私の能力のことは絶対に誰にも言わないでね」
　雅が何故、そんなにそのことを知られるのを厭がるのか、黒人には良く分からなかったが、自分の秘密を握られている今となっては、もう逆らう気力も失せていく。
　なんで、あの時、帰らなかったんだろう。
　忘れ物なんてしなければ、教室に戻らなければ、彼女の後を尾けなければ。ぐるぐると頭の中を後悔の渦が駆け巡り、黒人は立ち上がれない。
「これから、よろしくね。楠瀬黒人くん」
　雅は、にこにこと楽しげな笑みを満面に浮かべ、座り込む黒に手を延ばした。
　黒人は、雅の少女らしい笑顔を初めて見て、こんな顔も出来るのかと妙な感心をしてしまった。
　その笑顔は姉のそれとよく似ていることに、その時の黒人は気付かなかった。
　ただ、その笑顔がまた見られるのならいいやと思った。

****
§エピローグ

　誰も座らない席に転校生が来て、その席は、特別ではなくなった。
　その席に憑いていた霊は転校生によって浄霊され、その席は誰も座らない席ではなくなった。
それを知るのは黒人と雅の二人だけ。
　そして、黒人は雅と秘密を共有することになった。

　けれど、まだ黒人は知らない。彼女の真実を。

誰も座らない椅子

http://p.booklog.jp/book/15157

著者 : 荻塑做沙　ogisosasa
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ogisosasa/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/15157

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/15157